MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．４．６　発行元
第 464 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。今回もシリーズものが中心だが、鎌倉、京都、横浜とトラベルミステリ風の雰囲気も…。コロナ禍から抜け出て、遠出することも可能になるのだろうか…。

修学旅行での「鎌倉」

昭和６０年過ぎ、私の勤めていた中学校では修学旅行の内容の転換が計画された。それまでの「団体での観光旅行」形式から、少人数での「班別自主研修」に変えようというものである。生徒が自分たちで歩くコースを考え、体験・テーマ学習を中心に据えようと構想したのである。県内中学校でも最も早い構想・取り組みだった思う。

私が担任していた学年が最初の年に当たり、私は「自主研修」場所として「鎌倉」を選んだ。比較的安全で、徒歩移動で見学個所を回れるからである。北鎌倉駅前をスタートにして、鎌倉大仏がゴール。歴史が好きな私には非常に魅力的に見えたのだ。でも生徒の盛り上がりは思ったほどではなかった。歩くこと自体は楽しくこなしたが、「お寺巡り」は生徒の興味に結び付かなかったらしい。反省、反省。

その３年後は「渋谷周辺」に変えた。都内を移動することに自信が持てるようになったから。この時は十分な成果を上げることができた。

梓林太郎『鎌倉殺人水系』

２月に祥伝社ノン・ノベルスから出た本。『旅行作家・茶屋次郎の事件簿』シリーズの最新刊になる。いつもは大きな川に沿っての事件展開になるのだが、今回は鎌倉の話が中心になった。

茶屋の事務所を有名俳優の高山敬三が訪れ、付き合っている桐谷沙希という女性が行方不明になったので探してほしいという依頼話を持ち込んでくる。調べてみると沙希の自宅に脅迫状のようなものが投函されていた。やがて、沙希の溺死体が相模川で発見されて…。事務所のサヨコとハルマキ、そして『女性サンデー』編集長の牧原もいつもよりは精彩を欠いたような…。事件の結末もやや散らばってしまった印象である。

望月麻衣『京都寺町三条のホームズ 19 拝み屋さんと鑑定士』

２月に双葉文庫から出た本。シリーズ１９冊目。最近は中身が薄くなってしまった。今回は「拝み屋さん」澪人とのコラボだが、話の大筋はお化け・霊・陰陽師の方に取られている。ミステリ要素もほとんどない。

出だしは小松探偵事務所の場面で、澪人から鑑定の依頼とお化け屋敷の調査の依頼が出される。いつもながらに京都の名所案内にかなりの頁を割いている。鑑定は井戸茶碗の焼き物で、そこには霊が込められていた。清貴が解説をし、澪人が祝詞を唱えて霊を鎮めるという流れ。後半のお化け屋敷は北区の山奥にある明治時代に建てられた洋館が舞台。お化けが出るとの情報が寄せられ、その正体を皆で確かめに行く話になる。さて、幽霊は…。

宮ヶ瀬水『横浜・山手図書館の書籍修復師は謎を読む』

昨年１１月に宝島社文庫から出た本。本書はデビュー三作目に当たるようだ。主人公は山手図書館でアルバイトをすることになった大学生の藤本読也。読書が大好きなので司書の仕事をしてみたいと考えたのだ。でも、与えられたのは本の修復に当たる部所。そこにはスイスで修業した書籍修復師の波々壁という若い男が待っていた。波々壁は「物語に囚われた人達」を救い出す役目も持っているというのだ。読也は波々壁の助手としてはたらきながら、事件に巻き込まれていく。最初は中高一貫女子高の学長のシスターからの依頼。ホラー系の流れ。

麻見和史『琥珀の闇 警視庁文書捜査官』

２月に角川文庫から出た本。『警視庁文書捜査官』シリーズとしては９冊目。直前までライト文芸ミステリを連続して読んでいたので、安定感がまるで違うと感じてしまう。話の中に登場してくるひとつひとつの材料が、ストーリーの中にぴったり納まっている。よく考えられている。「これが実力だ」と思ってしまう。

今回は東京文学博物館に貼られていた封筒の中に入っていた奇妙な脅迫文が発端となる。「アキちゃん」という人物を誘拐したように書いてあり、意味不明の文が続いている。写真が同封してあり、ある部屋の中にシュラフなどが写っていた。事件が起きたという通報はないけれども捜査をした方がよいということになり、文書解読班に声がかかる。リーダーの鳴海理沙にピッタリの手掛かりなのだが、苦戦を強いられる。そして、岩下管理官が連れてきた情報分析班が対抗意識むき出しで活動するので、理沙の部下の矢吹はハラハラしている。果たして犯人の意図を解明することができるのか…。